

2020 コロナ禍の出来事

- 1月 ● 日本国内で初の感染者を確認
- 2月 ● 新型コロナウイルス感染症を特定感染症とする政令施行
- 国内初の死者を確認
- 3月2日から春休みまで一斉休校を要請
- 3月 ● 世界保健機関(WHO)がパンデミック(世界的大流行)を宣言
- 東京オリンピック・パラリンピックの延期が決定
- 4月 ● 東京、神奈川、大阪、福岡など7都府県を対象に緊急事態宣言が発出。市では図書館や大規模公園が閉鎖に
- 市内で初の感染者を確認
- 緊急事態宣言の対象を全国に拡大
- 1人一律 10万円の特別定額給付金の支給決定
- 5月 ● 5月6日で解除予定だった緊急事態宣言を5月末まで延長
- 国が新しい生活様式を公表。在宅でのリモートワークやオンライン会議の導入が広がり始める
- 緊急事態宣言が福岡を含む39県で解除
- 「#福津エール飯」第一弾が始まる
- 市内小・中学校で分散登校
- 6月 ● 市内小・中学校の通常登校が再開
- 全国での一日の感染者が5月14日以降約1カ月ぶりに100人を超える
- 7月 ● 国内死者数が千人を超える
- 8月 ● 福岡コロナ警報が発令
- 7月下旬から感染者数の増加が加速。7日には全国で一日最多の1,595人が感染
- 全国の感染者が累計6万人を超える
- 9月 ● 「#福津エール飯」第二弾が始まる
- 10月 ● 市内の感染者が30人を超える
- 福岡コロナ警報を解除

※令和2年11月2日現在の情報です



臨時休館した福岡郷づくり交流センター



毎週末、大勢の人がごみ出しに訪れる公設分別ステーション



感染防止対策のビニールシートを設置したお魚センターうみがめ



施設が閉鎖されたみずがめの郷の多目的広場



普段は多くの利用者でにぎわう図書・歴史資料館、文化会館が連なるカメラステージ



このとき乗客の姿はほとんどなかった1日平均9千人以上が利用する福岡駅構内

閑散とする緊急事態宣言中の市内：



使用禁止のテープが巻かれた遊具



施設が閉鎖され利用者がいない、なまぎの郷のすべり台



大きく臨時休館の貼り紙を掲示した市立図書館



毎日釣り客が訪れていた福岡漁港海浜公園

写真は全て5月14日に撮影しました

特集 ふくつの精神

— コロナに負けない不屈の魂 —

今年1月、国内で初めて新型コロナウイルス感染症の感染者が確認され、2月には県内でも感染者が出ました。世界中で蔓延し、56年ぶりの国内開催が決まっていたオリンピックは延期に。来年の開催も危ぶまれている状況です。

4月7日には緊急事態宣言が発出され、学校は休校、また、外出自粛や休業要請によって、経済はかつてない危機に直面しました。

市内でも、感染拡大を防ぐため図書館や大規模公園、駐車場などを閉鎖し、公園の遊具は使用禁止としました。行き場を失い、ストレスをため、どこにもぶつけようのない不安と焦り、気が滅入ってしまう日々が続きました。

この日々を、いかにして乗り越えてきたか。ある人は思い描く未来のために努力を続け、またある人は自分以外の誰かのために時間を費やし、どのような世の中になろうとも「つながり」続け、助け合う姿が福津市にはありました。

序章	閑散とする市内「コロナ禍の出来事」	2
第1章	出産 尊き「命」	4
第2章	学校教育 学び育てる	6
第3章	農と食 広がる支援・届けエール	8
第4章	スポーツ 夢の途中	10
第5章	祭り 繋ぐ伝統	12
終章	風船がつかない縁	14

末永く元気に長生きするよう 願いを込めて…



▲千叶世ちゃんをやさしく
見つめる廣渡亜佳梨さん

3人の子どもたちは千叶世ちゃんに会うのをとても楽しみにしていて、生まれたことを喜んでくれたそうです。すぐに面会できず、残念そうだったけれど、亜佳梨さんが毎日送っていた千叶世ちゃんの写真を見て、帰ってくるのを待ちわびていました。「面会できなかったからいつも泣いていたとか、そんなこともなく、子どもは強いなと感じた。それより、今回の妊娠、出産は私の方が大きなストレスを感じていたくらいで…」と、つらかった妊娠中の生活を振り返り、大きくため息を

つきました。
妊娠中は外出や、人と接することを避けていたという亜佳梨さん。特に妊娠後期は、体がきついのはもちろん、知らず知らずのうちにストレスがたまり、涙が出るほどつらかったと、当手を振り返りまなす。学校や幼稚園も休みになつて、子どもたちは外に出られず悶々とし、一緒に暮らす両親は口には出さないけれど、人一倍、亜佳梨さんの体を心配されていたそうです。けれど「感染したのではないのかと心配されてしまうから『つらい』とか『きつい』とは

言えなかった」と、さまざまに思いが行き交う中、家族を心配させないように、気丈に振る舞っていたそうです。
「今、本当に世界中が命の尊さに直面しているけれど、妊娠したときには、まさかこんな時代になるとは思っていなかった。その真つただ中に生まれたからこそ、末永く元気に長生きするという意味を持つ『ちとせ』と名付け、その願いを込めた。本当につらい時期を、お腹の中でよく乗り越えてくれた」と、無邪気に笑う千叶世ちゃんを、やさしく見つめていました。

出産



▲お母さんがあやすと無邪気にほほ笑む廣渡千叶世ちゃん

尊き「命」

自らに宿る、もう一つの命。「もし自分が感染してしまつたら」という不安を人一倍感じながら過ごす日々。つらく、苦しい時期を乗り越え、新たな命が誕生するまでの母親の軌跡をたどります。

つらかった妊娠中に込めた願い

「立ち合い分娩と面会を中止する」。産婦人科によって対応は異なっていたものの、新型コロナウイルス感染症の影響で、立ち会い分娩や面会などが制限されました。感染防止のため、待合室や診察室に付き添うこともできないなど、多くの家族が、喜びや不安、さまざまな感情を共有することが難しい状況となっていました。

「私が出産した産婦人科でも、私の出産直前まで立ち合い分娩や面会は一切禁止だった」と語るのは廣渡亜佳梨さん

んです。5月29日に千叶世ちゃんを出産し、4児の母になりました。夫の信樹さんは分娩に立ち会うことができずでしたが、出産後の面会は制限されてしまいました。面会する家族は、同居の家族が1人だけで、それも30分以内。さらに、その1人は分娩に立ち会った信樹さんだけと決められ、両親や子どもたちは面会することが許されないと、厳しい現実を突きつけられることに。ただ、産婦人科としても感染リスクを減らさなくてはならないという苦渋の決断であったため、亜佳梨さんは、それを受け入れ、乗り越えるしかありませんでした。



学校

オンラインコミュニケーション

子どもたちの元気な姿を見ようと、5月14日に福間南小学校で行われたオンラインコミュニケーション。担任の先生と児童がオンラインで顔を合わせ、クイズなどを実施。約15分間と、短い時間でしたが、友達や先生と久しぶりに話ができた児童、子どもたちの元気な姿を見ることができた先生どちらにとっても有意義な時間となりました。

分散登校

市内の小・中学校では、5月下旬に、学年や学級で登校日を分散し、授業が行われました。両隣の座席には座らずに机と机の間隔を空け、マスクを着用。児童たちは、不安と期待の入り交じる中、およそ3カ月ぶりの登校で友達との再会を喜び、6月から学校が再開することを楽しみにしていました。



教育

学び 育てる

新型コロナウイルス感染症が感染拡大したことで、市内の幼稚園や保育園、小・中学校は一斉休校に。長い春休みの訪れに、困惑し、変化のない毎日に疲弊する家族。そのとき子どもは、親は、どんな思いで、どんな行動をしていたのか。宮司2区の和田義弘さんに話を聞きました。

奪われた当たり前の日常 入学式も見合わせに

3月2日から始まった市内小・中学校の一斉休校。今年4月に小学校に入学した和田家の長男、康佑さんも一斉休校を受け、自宅で過ごすことを余儀なくされた一人です。康佑さんと姉の美里さんは、学校が再開するまでの間、自宅で母の手伝いや勉強などをして過ごしていました。友達と遊ぶこともできず、ストレスがたまりがちだったので、庭遊びやカルタなど、一緒に遊ぶ時間を大切にしていました。康佑さんは、この期間中に自転車の補助輪を外すという目標を立てていたそうですが、父の義弘さんが仕事から帰ると、1日で乗れるようになっていて「想像していた『父親の自転車特訓』を實現できなかった」と冗談交じりに語っていました。また、毎日自転車に乗り、縄跳びなどをしているのも、体力が有り余っているのか、夜は普段より寝つきが良くなかったとい

います。緊急事態宣言の発出後、感
染拡大を防ぐために小・中学校の入学式を見合わせる事が決まりました。康佑さんは、新しい生活への緊張や不安がありつつも、小学校への入学を楽しみにしており、この連絡に落胆していました。ただ、学校の配慮で、担任の先生からのメッセージ動画が配信されると、康佑さんは、まだ顔も分からない先生の声をワクワクしながら聞き、新しい学校生活への期待に胸をふくらませていたそうです。



カレンダーからは次々と楽しい行事が消されていききました。あるとき、カレンダーの裏に「コロナめ！」と書いてあることに気付き「当たり前」の日常を奪われることが子どもたちにとってどれほどのストレスになってきているのだろう」と考えさせられた義弘さん。そのこともあり、休校中は、会いに行けない祖父母や親戚とオンラインで会話するなど、楽しく笑っていられた過ごし方を親子で一緒に考えたいと思います。

慣れない環境でも
できることを
毎年、運動会や文化祭で見られる子どもの姿は、親の想像よりも格段にたくましく感じられるものです。世の中のさまざまな行事が相次いで中止となり「成長につながる貴重な経験が奪われているのは残念」と本音を語る義弘さん。「ただ、入学式中止の代わりに、記念撮影用の看板を設置してくれたら、長期休校中に手作りの動画を配信していただき、慣れない環境の中でもできることを考え、工夫しながら子どもたちを支えてくれる先生たちには感謝の気持ちでいっぱい。これからの人生、自分自身ではどうにもならないことはたくさんあると思うけれど、コロナ禍に負けず、前向きに強く育ってほしい」と、元気に遊ぶ康佑さんを温かく見守っていました。

農

広がる支援

花の香りや装いには人を自然と笑顔にする、すてきな力があります。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響で、花は行き場を失い、生花店や花農家に大きな影響を及ぼしました。

落ち込んだ市場価格 支援の輪広がるも戻らぬ需要

生花店や花農家にとって、卒業式や送別会、入学式などが重なる3月から4月は、1年で最も忙しくなる時期です。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響で、例年実施されているこれらの催しは中止が相次ぎ、注文のキャンセルが出たことが原因で、バラやダリアなどを中心に取引価格が下落してしまいました。

市内でバラを栽培する花田哲治さんは「緊急事態宣言が発出された4月の売り上げは前年の半分以下に減少した。出荷量は変わらないけれど、

単価が安いので売り上げが上がらない。かつてないほど消費が落ち込んでいる」と、需要と供給のバランスが崩れたことで、市場価格が落ち込んでしまったことを嘆きます。「もし、この状況が長く続けば、数年後にはバラを栽培していないかもしれない」と将来への不安を口にしながら、少し悲しげに手に取ったバラを見つめました。

花の消費拡大のために、家庭や職場に花を飾ることを勧める「花いっぱい運動」を国が実施したことをはじめ、さまざまな団体が家庭での花の消費を促進する活動を展開しました。6月の初旬には「花き卸売市場における生販連携機会の創出事業」

という取り組みで、卸売市場が花農家から花を買い上げ、その花々を公共施設などに花きの装飾として展示されました。市役所内でも、市の特産品であるトルコギキョウやバラなど、色とりどりの花が明るく色付きました。

困っている生花店や花農家を少しでも応援しようと、支援の輪が広がり、家庭での花の消費は拡大しました。しかしながら、結婚式などの催事が以前と同じように行われるには、まだ時間がかかりそうです。花田さんは「こんな状況でも花は咲く。元に戻ることを信じてやっていくしかない」と、苦しい胸の内を語ってくれました。

▲バラ園で、少し目を細めながら遠くを見つめる花田さん

届けエール

緊急事態宣言による休業要請で大変な打撃を受けた飲食店。それを支えたのは「いつもの店の、あの味を守りたい」という温かなエールでした。

休業か営業継続か… 分かれ道の先にあったエール

緊急事態宣言が解除された後、通常営業を開始したものの、感染を恐れてか、戻らぬ客足。多くの飲食店では、店内飲食よりも、テイクアウトやデリバリーを利用する人が多く、特にテイクアウト利用者が増加しました。

お店としては、常にリスクと隣り合わせで、お客さんが感染しているかどうか知るすべもない。それでも、生活するために営業を続けなければならぬ。難しい状況の中「折角来てくれた大切なお客さんなのでありがたい…。でも、その反面、店で

感染者が出たらと思うと、とても不安だった。一時的に休業しようかと何度も考えた」と、中華料理「春香」の店長、松山雄一さんは語ります。

感染症対策として、店の入り口にアルコール消毒液を設置。テーブルは対面同士で座らないよう椅子を間引き、レジにはビニールカーテンを設置していました。その様子に違和感を覚えた常連のお客さんが「何か変な感じだね」と愚痴をこぼしたこともあったそうです。

4月に新型コロナウイルス感染症が感染拡大し始めてから「お客さんの安全を第一に営業を続けていくにはどうしたらいいか」と打開策を考えていた松山さん。

ちょうどその時、大分県別府市が発案した「エール飯」が全国各所で拡散し、地域の飲食店を支援する策として注目されていました。市も、この流行に乗り「#福津エール飯」をスタート。市のホームページやインスタグラム、フェイスブック、広報紙などで市内68の店舗情報を発信しました。利用客の皆さんが料理の写真などでお店を紹介し、エールを送ってくれたことで、松山さんも「テイクアウトとデリバリーを利用するお客さんはとても多かった。休業しようとして考えていたが、皆さんのおかげで何とかやっていくことができたとお客さんへの感謝の気持ちを語ってくれました。

食





夢の途中



新型コロナウイルス感染症は、スでも、毎年夏に甲子園で行われる高校の記憶にも残っているのではないでまぬ努力で鍛え抜かれた心と身体で戦



スポーツ界にも影響を及ぼしました。中野球大会が中止になったことは皆さんしょうか。ここでは、日々の練習と弛う、二人の高校生に話を聞きました。

失われた甲子園への希望 それでも前を向いて

小学2年生の頃に福津で野球を始めた石橋孝汰さん。宗像高校では、打順は4番、守備では二塁手を務めます。石橋さんには、東筑高校で甲子園に出場し、活躍した3歳の離れた兄がいます。兄の背に自分を重ね、自分も甲子園に出場することを思い描き、中学・高校でも、野球一筋を貫いてきました。



「一緒にがんばって来たチームメイトの思い出、区切りとして試合に臨もう」と出場を決心したそうです。

昨年秋の新人戦で県大会準決勝まで勝ち上がり、初めて県のベスト4となった宗像高校。春の選抜大会21世紀杯推薦校にも初めて選ばれていました。しかし、その矢先、新型コロナウイルス感染症の影響で春の選抜大会が中止になってしまいました。野球は高校までで辞めると決めていた石橋さん。「県大会準決勝で敗れ、九州大会に出場できなかった。足りなかったものを少しでも補おうと、練習に励んできたのに、その成果を発揮する場所が失われてしまった」と、当時の空しさを

語ります。さらには全国高校野球選手権大会も中止になり「今までやってきた努力が無駄になってしまった」と、集大成の場が失われ、気持ちの整理がつかない日々が続いたといいます。そんな中、全国高校野球選手権大会の代替試合「がんばれ福岡2020」が開催されることが決まりました。ただ「甲子園を目指して今までやってきた。甲子園につながらないなら、受験勉強をした方がいい」とも考えたそうです。それでも前を向いて「一緒にがんばって来たチームメイト

中止となったインターハイ 経験糧に目指すは自衛官

小学2年生から、福津市と宗像市で活動する少年サッカークラブに入団した、現在高校3年生の福田大樹さん。筑前地区の選抜選手にも選ばれ、県大会にも出場したチームの主力選手でした。中学1年生の頃に、違うスポーツも経験してみようと、柔道部に転向しましたが、またサッカーがしたいと思い、中学2年生の頃、サッカー部に入学しました。その後、努力の甲斐あって、多数の全国大会出場経験があり、県内でも有数の実力校である東海大福岡高校のスポーツ特待生として入学することができました。



自衛官を夢見るのには理由がありました。中学生の頃、熱中症で倒れたとき、その場の保護者の中に自衛官がいて、迅速な応急処置で命を救われました。これに感動した福田さんは自衛官を目指すようになったそうです。「これまで続けてきたサッカーは、友達との絆を深め、サッカーだけではなく、挨拶などの礼儀を含め人間性を高めてくれたと感じている。自衛官になって、これまでの経験を生かし、人の役に立ちたい」と夢を語ってくれました。

しかしそれからは、得意だったポジションには各地から集まった優れた選手が大勢おり、挫折の連続でした。それでも、自分の長所であるスピードと豪快さを生かそうとポジションを変え、昨年の全国高校総合大会では、先発メンバーとして出場。準決勝で強豪の東福

自衛官を夢見るのには理由がありました。中学生の頃、熱中症で倒れたとき、その場の保護者の中に自衛官がいて、迅速な応急処置で命を救われました。これに感動した福田さんは自衛官を目指すようになったそうです。「これまで続けてきたサッカーは、友達との絆を深め、サッカーだけではなく、挨拶などの礼儀を含め人間性を高めてくれたと感じている。自衛官になって、これまでの経験を生かし、人の役に立ちたい」と夢を語ってくれました。

博 多祇園山笠の
流れを汲み、
江戸時代中期に博多の
くしだ 櫛田神社から津屋崎の
かみじょう 波折神社へ勧請するこ
とで始まった津屋崎祇
園山笠。平成16年に
市の無形文化財に指定
された、歴史と伝統あ
る祭りです。

津屋崎祇園山笠

繫ぐ伝統

つな

平成26年に発足300年を迎え、先祖代々、脈々と受け継がれてきた山笠の文化。その間、中断した時期もありましたが、まちの電線が張られれば山笠を低く、昇き手が不足すれば日程を変えて…と、幾度となく訪れた存続の危機を乗り越えてきたといえます。そして今年、新型コロナウイルス感染症の影響で延期となりました。伝統を繫ぐ上で中心的役割を担う津屋崎祇園山笠振興会会長は何を思うのか。その苦悩と今後の展望に迫ります。



親子代々愛する山笠 次世代へと繫ぐために

「悔しいけれど、今回は延期せざるを得なかった」と話すのは、津屋崎祇園山笠振興会会長を務める西野正信さん。山笠の目的を「疫病退散・災害防除」と掲げているからこそ「なんとでも開催するんだ」と、振興会の皆さんは一致団結していたといいます。しかし、5月の博多どんたくが中止となり、博多祇園山笠も延期が決定。どうしても人が密集してしまう山笠を実施するのは難しいというところで津屋崎祇園山笠も延期することが決まりました。

会長としての重責を担い、延期を決断した西野さんは「46年前に親父が復活させた山笠を、なんで自分が止めないといけないのか」と、親子2代にわたる因縁めいた



▲若かりし頃の西野さん。孫の龍太郎さんと一緒に

ものを感じていました。西野さんの父、正七さんも、大の山笠好きだったため、西野さんは生まれながらに山笠と関わってきたといえます。昭和30年頃から始まった高度経済成長期。博多祇園山笠が曜日に関係なく7月15日に開催されるのと同様に、当時の津屋崎祇園山笠も7月19日に開催されていきました。経済が飛躍的に成長を遂げたのに伴って、山笠の若い昇き手が減少。山笠を昇くことができなくなり、人手不足になってしまいました。「やめちゃいかん」と言っていた。最後まで反対があったものの、昭和38年に中止となりました。それでも次の年、また次の年にも「何か足りない」と感じていた正七さんが発起人となって「もう一度山笠を作ろう」と動き始めました。そして12年後の昭和50年

に、とにかく山笠を1本作ろうということで復活。以前と同じ津屋崎祇園山笠に戻したいという正七さんの願いが叶ったのは、それから5年後のことでした。西野さんは「今年1年は恨まれるかもしれない。決断はともつらかったけれど、私たちは次につなぐ使命がある」と、未来を見つめます。

「祭りは、好きな者だけが熱意を持ってやっても続かない。後継者をつくってこそ次につながる」と西野さんは後継者育成にも力を入れていきます。その活動の一つとして、津屋崎小学校の3年生に出前授業を実施。歴史を伝えるだけではなく、子ども山笠をつくり、クラス全員で山笠を動かします。子どもも先生も大声を出して盛り上がり、クラスの絆が深まるのを

子どもたちは体感できているといえます。西野さんの孫、龍太郎さんは、小学生の頃この出前授業を体験。西野さんは「龍太郎が中学1年生になった今も、そのときの絆を大事にして、地域の祭で子ども山笠を披露してくれた。それ自分たちの後輩にも残していこうと実行委員会まで作ってくれて、まさに私の願い通りだった。こういった核となるものが一つでもあれば、それが広がって団結心が生まれていく。そうして津屋崎が団結する、その一つが山笠だと思ふ」と親から孫まで4代にわたり山笠を愛し、その役割と大切さを後世に繫ぐ役割を担いながら、また次の100年に続いていくことを心から願っていました。



◀津屋崎の波折神社で少し悲しげに遠くを見つめる西野さん

祭り

風船がつないだ縁

勝浦地区で毎年開催しているマル勝まつりでは、最後のプログラムとして地域の人や児童が菜の花の種と、手紙を付けた風船を飛ばしています。種が届いた人からは「届きました」「菜の花が咲きました」という連絡が入るそうです。

昨年のマル勝まつりで飛ばした風船の一つは、京都府刈田町の「医療法人白寿会」に勤める中島さんに届き、勝浦小学校に「風船届きました。種をまいています」と電話がありました。その後も、中島さんと勝浦小学校とのつながりは続き、令和元年度の卒業生全員に文房具をプレゼントしてくれたこともあるそうです。

令和2年6月、小学校は再開したものの、新型コロナウイルス感染症感染予防のため、児童が下校した後、先生たちは消毒作業をしなければなりませんでした。そんなとき、中島さんから「何か困っていることはありませんか」と、一本の電話が入りました。

消毒作業のときに使うビニール手袋を業者に発注していたものの、受注が増えているせいか在庫切れで、調達ができずに困っていました。花田校長が、下校後の消毒作業の話やビニール手袋が不足している話をすると「分かりました。私が経営する会社で商品を取り扱っているので送ります」と返事があったといいます。するとその翌日、大きな段ボールが速達で届き、中身は1600枚のビニール手袋でした。

「withコロナ時代」と呼ばれる今、働き方や学び方、さまざまなことが変化しています。さらにオンライン化が進み、人との関わり方も変わっていくでしょう。そんな中でも、変わらぬ伝統が縁をつなぎ、互いに励まし、助け合うことにつながりました。たとえ顔が見えなくても、触れ合うことができなくても「つながり続ける」ことの大切さは変わりません。空に舞う風船が人と人をつないだように、これからも、つながりが生まれ続ける福津市であることを願います。



市民ボランティア「ふくふく Foods」の皆さん
子育て世代への食品配布



福津暮らしの旅
オンライン旅



多数の団体や個人から
消毒液やマスクなどの寄贈

傾聴ボランティアほほえみ
ふれあいコール



花火師の皆さん
キズナ花火

考えて、工夫して、もがいて
今できることを…
その先にある笑顔のために
がんばろう！福津



ふくつ観光協会
オンラインバスツアー



オンライン公民館@福津 実行委員会
オンライン公民館



市商工会青年部
県持続化緊急支援金申請支援



終息したらまた美味しい空気を吸いに帰ります。(Y・Kさん/北九州市)

今は福津には帰れないけど、みんなで乗り越えて、笑顔で福津に帰省できる日を楽しみにしています。(E・Kさん/埼玉県)

落ち着いたら帰省します。たくさん笑顔に会えますように。(Y・Mさん/鹿児島県)

帰省できなくなると残念ですが、いつもふるさと福津を想っています。こんなときだからこそ、次に福津に帰ることが一層楽しみになっています。今を乗り越えていきましょう。(A・Mさん/東京都)

小さな子どもがいるので帰省を諦める事になりましたが、この事態が収束したら、また自然豊かで人も温かい福津に帰りたいたいと思っています。今は大変な時期ですが、一人一人が出来る事をやって、1日でも早くいつもの日常を取り戻せるように一致団結してがんばりましょう。いつも福津の事を想っています。(A・Yさん/大阪府)

不屈の精神でがんばりましょう。(M・Hさん/アメリカ)

離れてみて、福津が恋しく感じます。終息したら福津に帰りたいです。(K・Tさん/遠賀郡)

今は帰れないけど、思いはひとつ。遠くにしても、故郷の皆さん、実家の家族の無事を祈っています。(M・Aさん/兵庫県)

緊急事態宣言中に 海外からも届いた 温かい言葉

感染拡大を防ぐため、市では「帰省せず自宅で過ごす」ことを呼び掛けました。すると、この趣旨に賛同してくれた市外の福津市出身者 54 人から、温かい励ましの言葉が届きました。